

「侍ジャパン」の連覇に想う

09.03.27 守山裕次郎

第2回WBCで「侍ジャパン」が見事な2連覇をとげた。野球とは筋書きのないドラマとよく言われるが、今回の大会は、まるで素晴らしいシナリオライターによって描かれたドラマそのものという結末であった。

決勝の対韓国戦、9回裏1点リードの2アウト、1・2塁、ダルビッシュが投げた渾身の1球をレフト前へ運ばれて同点とされ、延長10回表の「侍ジャパン」、2死2・3塁でバッター・イチロー、敬遠せずに敢えて韓国バッテリーが勝負してきた場面が、優勝決定戦に相応しい最高の場面であった。

準決勝まで、本来のバッティングとは程遠い不振にあえいでいたイチローではあったが、この日はそれまで3安打と、ようやく彼本来の調子を取り戻しつつあった。ファウルで粘った後に見事に振り抜いた「執念の打球」がセンター前に抜けて2点タイムリーとなり、その裏をダルビッシュが今度は押さえて見事2連覇達成という、日本人にとっては最高の感動が得られた大会となり、野球というスポーツの楽しさ、奥深さが改めて実感できた。

そして試合後のイチローいわく：「苦しいところから始まって、苦しさが辛さになって、辛さを超えたら心の痛みになった。だけど最後は笑顔になれた。最後の打席では、神様が降りてきてくれた。そして一つの壁を越えられた。」と：日の丸を背負って、全国民からの大きな期待を受け、強烈なプレッシャーの中で結果が出せず、もがき苦しんでいた様子は、メジャーで活躍している日頃のイチローとは全く異なり、痛々しいほどでもあった。

それにしてもイチローも松坂も、本シーズンを前にして故障の危険性もあり、例え優勝しても、彼らにとっては大した報酬も期待できないWBCの大会に、なぜこれほどまでに「入れ込む」のか、その理由が米国人には全く理解ができないそうである。恐らく彼らは日本を離れ異国に身を置いてみて、はじめて「日本人としてのアイデンティティー」が強く実感でき、それまで眠っていた「愛国心」が自然に湧き上がった結果なのだろうと思われるが、これもまさに「侍魂」の一つの表れなのであろう。

表彰式後の「シャンパンファイト」ではお互いの健闘を祝福し、原監督の「お前さんたち侍は、本当に強くなった。おめでとう！」という発声により、シャンパンをかけ合う無邪気な姿が見られたが、同じ目標に向って1ヵ月間を共に過ごし、戦った仲間同士にしか判らないであろう連帯感と安堵感が感じられ、「侍たち」のチームワークの良さを象徴しているようでもあった。

今回の「侍ジャパン」は、優勝候補のキューバを2度完封し、米国をも撃破して、韓国に3勝2敗（一度はコールド勝ち）と優勝に相応しい戦績だったが、聞くところによると、野球通で有名なキューバのカストロ前議長は、キューバチームよりも「侍たち」を絶賛しているようで、それまで日本の野球に厳しい目を向けてきた彼も、壮絶な戦いとなった日韓の決勝戦に、激しく心を揺さぶられたそうである。そして、世界一を決める決勝打を

放ったイチローを「世界最高の打者」とべた褒めし、強打者がひしめくキューバ打線を差し置いて、最大級の賛辞を送ったそうである。

一方、米国メディアも、「侍ジャパン」の戦いを高く評価する報道が目立っている。ニューヨーク・タイムズ紙は、日韓戦を「革命的な素晴らしい試合だった」とするとともに、「もし試合を見逃したとしたら、あなたは歴史的なゲームを見逃したことになる」とも報じているそうである。この大会での日韓両チームの活躍は「野球の発祥国アメリカ」を始め、その影響の強い中南米の国々に対し、「野球の原点」を考え直すきっかけになったと考えても良いのではなかろうか？

野球というスポーツはご承知の通り、3つの塁を経由して、ホームベースにいかにも多くたどり着くかを競うものである。3つのアウトを取られるまでに、9人の打者が協力してこの作業を行うという、まさに「チームワーク」が最も問われるスポーツである。勿論強打者を揃えて打ちまくり、華々しく勝てるならそれに越したことはない。だが現実には優秀な打者でさえ、3回に2回は確実に失敗する訳である。それを無視して、強打者ばかり揃えて失敗しているのが、現在のヤンキースであり、かつての巨人だったのであろう。

身体ばかり大きくて、鈍足の打者が放つ本塁打の魅力もさることながら、イチローのように内野ゴロでも「あっという間に1塁を駆け抜ける」俊足や、「レーザービーム」での捕殺など、スピーディーな野球の魅力を彼が米国人に示した功績は計り知れない。

このWBC2連覇という結果は、日本の目指す野球が正しいことを証明したのであろう。今回のWBCで盛り上がったフィーバーを、最近低迷している国内野球の魅力向上のための礎として、プロ野球機構には制度等も含めた早急な改革を望むところである。そしてイチロー、松井、松坂に続く、新たな若武者の出現にも期待し、4年後に再び「侍たち」がWBC3連覇に向って、夢を躍らせる姿を見るのが今から楽しみである。

閑話休題。

イチロー他の「侍たち」が活躍しWBC2連覇を果たしたその晩、民主党の小沢一郎代表が、自分の秘書の逮捕はあったが、続投することを表明した。しかも涙を流しながら・・・昼のイチローが涙を流したのなら、その理由は誰にもはっきり判るのだが、夜の一郎が流した涙の理由とは、はたして何なのであったのだろうか???その翌日の晩、ある政治ブログを見ながら、夜中に一人で思わず笑ってしまったものがあり、以下に紹介したい。

- ・ 鈴木イチローは日本の誇り!! : 小沢一郎は日本の恥!!
- ・ 挑戦が好きなのがイチロー : 朝鮮が好きなのが一郎
- ・ 投手から転向したのがイチロー : 党首から転落しそうなのが一郎
- ・ 投手の隙をつくのがイチロー : 法律の隙をつくのが一郎
- ・ 保守的なのがイチロー : 保身的なのが一郎
- ・ ヒットが話題になるのがイチロー : 秘書が話題になるのが一郎
- ・ 謙虚なのがイチロー : 検挙なのが一郎
- ・ 返球の制球がすごいのがイチロー : 献金の請求がすごいのが一郎

- ・ 自分に厳しいのがイチロー : 自分に甘いのが一郎
- ・ 試合を休まないのがイチロー : 国会を休むのが一郎
- ・ ヒットで決勝点なのがイチロー : 起訴で決定打なのが一郎
- ・ 祝杯をあげられるのがイチロー : 収賄であげられるのが一郎
- ・ 世界の一位を奪ったのがイチロー : 政界の地位を失ったのが一郎
- ・ 自分に腹が立つのがイチロー : 秘書に腹が立つのが一郎
- ・ 墨を盗むのがイチロー : 国を売るのが一郎
- ・ カレーが好きなのがイチロー : マネーが好きなのが一郎
- ・ 韓国に狙われるのがイチロー : 監獄に狙われるのが一郎
- ・ どんなに誹謗中傷されても諦めないのがイチロー
: どんなに誹謗中傷されても辞めないのが一郎
- ・ 日本の未来を明るくさせてくれるのがイチロー
: 日本の未来を暗くさせてくれるのが一郎

最後の一句がすべてを表現しているが、世界一流になった野球界の「侍たち」に比べて、自民党も含めて未だに「三流以下」に甘んじていても恥じない政治家連中には、イチローの「爪の垢」でも飲ませるしか、改善方法はないのであろうか。

以上